

医療法人橘会



東住吉森本病院



臨床研修プログラム

平成 31 年度版

各科プログラム

目 次

(1) 各科プログラムと週間予定表

・小児科（1ヶ月コース）大正病院	1
・産婦人科（1ヶ月コース）大正病院	3
・精神科（1ヶ月コース）丹比荘病院	5
・地域医療（0.5ヶ月コース）東住吉森本リハビリテーション病院	7
・地域医療（0.5ヶ月コース）藤崎クリニック	9
・消化器内科	11
・循環器内科	13
・呼吸器内科	15
・外科	17
・整形外科	19
・形成外科	21
・脳神経外科	23
・救急	25
・麻酔科	27
・放射線科	29
・緩和ケア科	31

(2) 臨床研修到達目標（EPOC 評価項目一覧）

・行動目標	33
・経験目標	34

(3) 研修スケジュール

・東住吉森本病院研修プログラム（例）	42
--------------------	----

小児科 臨床研修プログラム（大正病院）

責任者	岩本 幸久（副院長）
医師数	2名
取得している資格	日本小児科学会専門医 臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標（G10）

- ①小児の代表的疾患と小児の特性を理解し、これを経験する。
- ②小児救急患者の初期対応を上級医と行い、小児救急疾患の診療能力と基本的な手技を習得する。
- ③乳児健診にて小児の正常発達や両親への指導を学ぶ。

II. 行動目標（SB0s）

- ①子供にできるだけストレスをかけずに診察し、小児の基本的な身体所見を評価できる。
- ②両親から必要な病歴聴取ができる。
- ③臨床所見から小児に一般的な疾患や救急疾患を鑑別にあげることができる。
- ④治療の計画を自分で組み立て、上級医と議論できる。
- ⑤健常児の成長、発達に関する知識を述べることができる。
- ⑥母親の具体的な育児不安・不満に対応する「育児支援」を説明できる。
- ⑦小児の採血や点滴を、子供に声かけしながらできる。
- ⑧小児の髄液検査・導尿による尿検査ができる。
- ⑨小児の痙攣について説明できる。
- ⑩小児のウイルス感染症（流行性耳下腺炎、水痘、突発性発疹、インフルエンザ、RS ウイルス感染症、ヒトメタニューモウイルス感染症）と細菌感染症に対処できる。
- ⑪小児の喘息、先天性疾患に対処できる。

III. 研修方略（Ls）

- ①一般小児科外来を見学し、実際に診療する。
- ②予防接種や乳児健診を見学し、実施する。
- ③小児科入院症例の担当者となり、診断・治療に参加する。
- ④入院時の病歴・既往歴・家族歴・発達歴の聴取、診察方法を学ぶ。
- ⑤保護者との関わり方、病状説明の手法を学び、実際に行う。
- ⑥臨床症状や検査データから治療方針を上級医と決定し、治療に関わる。
- ⑦回診で、受け持ち症例の経過や現在の問題点などを短時間でサマリーする。

IV. 週間スケジュール（研修期間1ヶ月）

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来	外来	外来	外来	外来	外来	休日
午後	病棟	予防接種 病棟	病棟	病棟	乳児健診 病棟		

V. 評価

①行動目標の評価（別掲）

②経験目標の評価（別掲）

③評価と指導體制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医およびスタッフが研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医の評価を行う。

産婦人科 臨床研修プログラム（大正病院）

責任者	南條 亨
医師数	2名
取得している資格	日本産科婦人科学会専門医
	母体保護法指定医
	日本臨床細胞学会専門医
	臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標（GI0）

- ①女性特有の疾患の診療に必要な基礎的知識・技術・態度を習得する。
- ②妊産褥婦の診療に必要な基礎的知識・技術・態度を習得する。

II. 行動目標（SB0s）

- ①産婦人科疾患患者および妊産褥婦の問診、病歴の記載および適切なプレゼンテーションができる。
- ②産婦人科的診察法のうち、上級医の指導のもとで、視診・触診・内診ができる。
- ③基本的臨床検査法として、免疫学的妊娠反応、超音波検査（経腹法、経膣法）、骨盤 CT、骨盤 MRI 検査の所見が理解できる。（超音波検査に関しては、実施ができる）
- ④催奇形性についての知識を有し、妊産褥婦に適切な処方箋の発行、注射の施行ができる。
- ⑤産婦人科的急性腹痛の診断・治療を上級医とともに診療できる。
- ⑥正常な妊娠・分娩・産褥の知識を有し、上級医とともに管理ができる。
- ⑦帝王切開、婦人科良性疾患手術に助手として参加し、知識・技術を身につける。
- ⑧女性患者のプライバシーに配慮した診療態度を身につける。

III. 研修方略（Ls）

- ①研修期間の初日に、指導医から産婦人科研修のオリエンテーション（ガイダンス）を受ける。
- ②指導医、上級医による医療チームの一員として、研修を行う。
- ③適宜、指導医、上級医、コメディカルスタッフからのアドバイスをもとに、研修を行う。
- ④外来診療：産科・婦人科の各外来担当指導医と共に、診察を行う。
- ⑤病棟診療：入院患者の診療。毎日回診し、診療録を記載する。

妊婦の超音波検査、分娩管理/第1期～産褥期（助産師と共に観察し、日中の分娩には全例立ち会う。会陰裂傷縫合を指導医の立会いのもと行う）。婦人科の周術期管理を行う。可能な限り手術に立ち会う。夜間・休日の分娩・急患に関しては、拘束日を決めて、上級医とともに診療にあたる。

IV. 週間スケジュール（研修期間1ヶ月）

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来 （産科・婦人科）	外来 （産科・婦人科）	外来 （産科・婦人科）	外来 （産科・婦人科）	外来 （産科・婦人科）	外来 （産科・婦人科）	休日
午後	病棟・手術	病棟・手術	病棟・手術	病棟・手術	病棟・手術		

V. 評価

①行動目標の評価（別掲）

②経験目標の評価（別掲）

③評価と指導体制

産科、婦人科ともに指導医、上級医の指導のもと、診療を行う。研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医およびスタッフが研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医の評価を行う。

精神科 臨床研修プログラム（丹比荘病院）

責任者	池谷 俊哉（院長）
医師数	8名
取得している資格	精神保健指定医 臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標（G10）

- ①外来診察と病棟診察を通して、基本的態度、精神医学的診断と治療に関する基礎的知識、精神医療の概要について習得する。
- ②医療コミュニケーション技術を習得する。

II. 行動目標（SB0s）

- ①精神的現症をとる能力を養い、診断と治療計画を立てられるようにする。
- ②基本的な精神科診断面接と治療面接ができるようにする。
- ③向精神病薬の知識と薬物療法の基本を学ぶ。
- ④外来診察の実際と外来での集団精神療法について学び、その基礎的知識を習得する。
- ⑤入院治療の実際と病棟における集団精神療法、社会生活技能訓練、患者を取り巻く環境の調整について学ぶ。
- ⑥コンサルテーション・リエゾン精神医療の基本を習得する。
- ⑦統合失調症、幻覚、妄想を主とした精神病性障害の診断と治療の基本を習得する。
- ⑧抑うつ病像を呈する疾患の診断、鑑別診断、治療の基本を習得する。
- ⑨不安障害、解離性障害、身体表現性障害などの診断、鑑別診断、治療の基本を習得する。
- ⑩認知症患者の診断と治療について学び、その基本を習得する。
- ⑪心理テストとその適応と実際、個人心理療法とその適応と実際について学び、基本的な知識を習得する。
- ⑫神経心理学的評価法、その適応と実際について学び、基本的な知識を習得する。
- ⑬精神保健福祉法とその入院治療への適用について学ぶ。
- ⑭地域支援体制を理解し、病棟での各職種で構成されるカンファレンスに参加し、精神科特有のケア体制について学ぶ。

III. 研修方略（Ls）

- ①毎日午前は外来新患の予診をとり、その後陪診することにより、症例の診断と初期の治療を理解する。
- ②毎日午後は指導医の指導・教育のもとで精神疾患患者の主治医として治療にあたる。又、精神症状を合併する身体疾患患者への対応（コンサルテーション・リエゾン活動）と治療にあたる。
- ③クルズスを受ける。

（精神症状の診方、面接技法、薬物療法、臨床検査（心理テスト、脳波、画像診断など）、精神保健福祉法、地域支援体制）

④病棟カンファレンスに参加する。

⑤緊急措置診察時の対応を学ぶ。

IV. 週間スケジュール（研修期間1ヶ月）

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来	外来	外来	外来	外来	休日	休日
午後	病棟 カンファレンス	病棟	病棟	病棟	病棟		

V. 評価

①行動目標の評価（別掲）

②経験目標の評価（別掲）

③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医およびスタッフが研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医の評価を行う。

地域医療 臨床研修プログラム（東住吉森本リハビリテーション病院）

責任者	服部 玲治（院長）
医師数	4名
取得している資格	日本外科学会専門医
	日本心臓血管外科学会専門医・修練指導者
	日本胸部外科学会専門医
	日本血管外科専門医
	日本呼吸器学会専門医
	日本呼吸器外科学会専門医
	日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医
	臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標（GIO）

- ①地域保健・医療を必要とする患者と家族に対して疾患だけでなく機能障害、能力障害、社会的背景を含めて十分に理解する。
- ②回復期、維持期の医療を体験し実践する。
- ③医師、看護師、コメディカルスタッフ、その他の職種の業務内容を知り、連携と協力により情報を有効に活用できる。

II. 行動目標（SB0s）

- ①糖尿病・高血圧の管理、生活指導ができる。
- ②麻痺や筋力低下に対するの管理、生活指導ができる。
- ③経管栄養、気管切開の維持管理ができる。
- ④認知症、高次脳機能障害の有無の判別、適切なコンサルテーションができる。
- ⑤摂食嚥下障害のスクリーニングテストができる。
- ⑥ADL 評価、FIM の評価ができる。
- ⑦廃用症候群や活動能力低下に対するの適切なリハビリテーション処方が作成できる。
- ⑧患者・家族との良好な人間関係を保ち、共に問題解決にあたることができる能力を養う。
- ⑨医療の社会的側面を理解し、対応する方法を習得する。

III. 研修方略（Ls）

- ①回復期リハビリテーション病棟での入院患者の再発予防、生活指導を行う。
- ②維持期の患者の身体管理、生活指導を行う。
- ③介護保険制度を理解し適切なコンサルテーションを行う。
- ④各種カンファレンスに参加する。
- ⑤理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・看護師・メディカルソーシャルワーカーと協同でリハビリテーション総合実施計画書を作成し、患者家族に説明にあたる。

IV. 週間スケジュール（研修期間 0.5 ヶ月）

	月	火	水	木	金	土	日
午前	病棟	病棟	病棟	病棟	病棟	休日	休日
午後	病棟 カンファレンス	病棟 カンファレンス	病棟 カンファレンス	病棟 カンファレンス	病棟 カンファレンス		

V. 評価

①行動目標の評価（別掲）

②経験目標の評価（別掲）

③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医およびスタッフが研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医の評価を行う。

地域医療 臨床研修プログラム（藤崎クリニック）

責任者	藤崎 秀孝（院長）
医師数	1名
取得している資格	日本東洋医学会専門医 臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標（G10）

- ①地域保健・医療を必要とする患者と家族に対して診療所の役割（病診連携・在宅医療への理解を含む）について理解し、実践する。
- ②地域の高齢化社会における医療と福祉介護に対応でき、予防医療や改善指導などを通じて地域医療の現場を体験し理解する。

II. 行動目標（SB0s）

- ①心理社会的な背景（生活の様子、家族との関係、ストレス因子の存在など）を含めて、適切な病歴が聴取できる。
- ②必要な身体診察が正確にできる。
- ③生活者である患者に目を向けて的確な問題リストを作成できる。
- ④患者とその家族の要望や意向をくみ取ることができる。
- ⑤健康維持に必要な患者教育（食生活、運動、喫煙防止または禁煙指導）が行える。
- ⑥患者に対して思いやりをもって接し、共感を示すことができる。
- ⑦周囲のスタッフと良好なコミュニケーションがとれる。
- ⑧公衆衛生機関としての保健所の機能とその中での医師の役割を述べることができる。
- ⑨診療情報提供や介護保険のための主治医意見書の作成を補助できる。
- ⑩地域の特性が、患者の罹患する疾患、受療行動、診療経過などにどのように影響するかを述べることができる。
- ⑪患者の問題解決に必要な医療・福祉資源を挙げ、各機関に相談・協力ができる。
- ⑫医療・保健・福祉・介護の法則・制度を理解し、医師として適切に行動できる。
- ⑬結核、その他の感染症の予防対策を理解し、地域および施設での対策（予防接種・患者管理）などに参加する。
- ⑭かかりつけ医の役割を述べるができる。

III. 研修方略（Ls）

- ①指導医の指導のもとに外来診療を経験し、患者・家族への予防医療・生活習慣病・認知症などの指導能力を高める。
- ②指導医の訪問診療に同行し、在宅医療を学ぶ。
- ③カンファレンスに参加する。
- ④社会福祉施設、介護老人保健施設の現場を経験し、知識・態度・技能を学ぶ。

IV. 週間スケジュール（研修期間 0.5 ヶ月）

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来	外来	外来	外来	外来	外来	休日
午後	往診	往診	往診	カンファレンス	外来		

V. 評価

①行動目標の評価（別掲）

②経験目標の評価（別掲）

③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医およびスタッフが研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医の評価を行う。

消化器内科 臨床研修プログラム

責任者	仲川 浩一郎（副院長、外来診療部長）
	藪さこ 恒夫（内科主任部長）
医師数	15名 ※後期研修医在籍
取得している資格	日本内科学会認定内科医・認定教育施設指導医
	日本消化器病学会専門医・指導医
	日本消化器内視鏡学会専門医・指導医
	日本肝臓学会専門医
	日本医師会認定産業医
	日本消化管学会胃腸科認定医
	臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標（G10）

消化器・胆膵・肝臓疾患の全ての領域における診断・加療能力を身につけることはもちろんのこと、一般内科に及ぶ知識習得を目指し、特にプライマリケアの重要性を認識するとともに、医師としての基本的姿勢を学ぶことを目標とする。

II. 行動目標（SB0s）

- ①一般内科疾患・消化器疾患患者の医療面接、身体診察を適切に行うことができ、カルテに記載できる。
- ②医師としての基本的手技（チューブ挿入、体腔穿刺など）や内科疾患における救急処置を経験する。
- ③腹痛・消化管出血・黄疸の鑑別診断ができる。
- ④腹部超音波検査にて腹部一般スクリーニングができる。
- ⑤上部消化管内視鏡検査にて、病態の把握と、指導医のもとで抜去ができる。
- ⑥下部消化管内視鏡検査にて、病態の把握と、内視鏡処置の介助ができる。
- ⑦胆道・膵臓疾患の鑑別診断ができる。
- ⑧急性肝炎の診断、適切な治療法を選択できる。
- ⑨慢性肝炎の適切な治療法を選択できる。
- ⑩肝硬変の重症度分類を理解し、合併症を把握できる。
- ⑪肝細胞癌の診断、適切な治療法を理解する。

III. 研修方略（Ls）

- ①病棟では、指導医とともに入院患者の診療に携わり、疾患の病態を把握する。
- ②検査および治療計画の立案を指導医とともに立て、検査、処方、点滴の指示ができるようにする。
- ③内科初診外来にて、指導医・上級医とともに紹介状をもたない初診患者の初期診療を行う。又、内科外来では退院後初回受診患者、定期的を受診する慢性疾患患者等の診療を行う。
- ④消化器・肝臓疾患を中心に、診断から内科的治療の過程を学び、さらに外科、放射線科や病理診断科などの多方面にわたる疾患考察を深める。

- ⑤上部・下部消化管内視鏡検査、腹部超音波検査に携わり、疾患鑑別を行う。
- ⑥早期消化管がんに対する内視鏡治療（ESD など）や内視鏡的胆石除去術、胆管ドレナージ術、胆管ステント留置術について適応を理解し、その方法と術後管理について学ぶ。
- ⑦進行性消化器がん患者に対する化学療法、放射線療法の適応と内容について理解し、治療中の管理について学ぶ。また、末期がん患者に対する緩和医療について学ぶ。
- ⑧高齢者医療について学び、内視鏡的胃瘻造設術（PEG）の適応と管理を理解する。
- ⑨消化器内科カンファレンスで、全入院患者の疾患の理解と治療計画を学ぶ。

IV. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
朝	受持ち患者の診察処置・オーダーカンファレンス	受持ち患者の診察処置・オーダーカンファレンス	受持ち患者の診察処置・オーダーカンファレンス	受持ち患者の診察処置・オーダーカンファレンス	受持ち患者の診察処置・オーダーカンファレンス	受持ち患者の診察処置・オーダーカンファレンス	休日
午前	内視鏡検査 ICU検査	内視鏡検査 ICU検査	内視鏡検査 ICU検査 造影検査	内視鏡検査 ICU検査	内視鏡検査 ICU検査	内視鏡検査 ICU検査	
午後	内視鏡検査	内視鏡検査	受持ち患者の診察処置・オーダー	ERCP 腹部血管造影検査	肝臓検査・治療	受持ち患者の診察処置・オーダー	
夕方	抄読会						

※休日は日曜日と各自1日公休日があり

V. 評価

- ①行動目標の評価（別掲）
- ②経験目標の評価（別掲）
- ③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医および指導者が研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医・指導者の評価を行う。

循環器内科 臨床研修プログラム

責任者	坂上 祐司（循環器内科部長、地域医療連携センター長）
医師数	9名 ※後期研修医在籍
取得している資格	日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・認定教育施設指導医
	日本循環器学会専門医
	日本超音波医学会専門医・指導医
	日本心臓病学会上級臨床医（FJCC）
	日本心血管インターベーション治療学会専門医・指導医
	日本不整脈心電学会認定不整脈専門医
	日本医師会認定産業医
	アメリカ心エコー図専門医試験（ASCeXAM）合格証取得
臨床研修指導医養成講習修了	

I. 一般目標（G10）

全人的医療を行う医師を目指すために、将来循環器内科医を志望する医師のみならず、いずれかの専門医を志望する医師にとっても必要だと思われる循環器疾患診療の知識・技術を習得すること。

II. 行動目標（SB0s）

- ①胸痛や呼吸困難、動悸を訴える患者の適切な鑑別診断ができる。
- ②循環器疾患における身体所見の診察及び解釈（視診、触診、聴診）ができる。
- ③循環器疾患における基本検査の適応決定と実施、その解釈（血液、心電図、胸部X線、CT）ができる。
- ④基本的な心エコー図検査の実施と解釈ができる。
- ⑤循環器疾患の侵襲的検査・治療のうち基本的手技（血管穿刺、カテーテル操作等）ができる。
- ⑥心不全や虚血性心疾患、不整脈に対する適切な非侵襲的療法（薬物療法）の選択ができる。
- ⑦弁膜症や虚血性心疾患、不整脈に対する非薬物療法（カテーテル治療、デバイス治療、外科治療）の選択ができる。
- ⑧循環器疾患の危険因子に対する適切な管理ができる。
- ⑨他科疾患に循環器疾患が合併した際の対応を身につける。
- ⑩循環器救急診療における基本手技（電氣的除細動等を含む救命処置など）を身につける。

III. 研修方略（Ls）

- ①指導医の指導のもと、病歴聴取、身体所見診察、すでに判明している検査結果の解釈、これらを行い、さらに必要な検査、そして必要な治療を計画し、実行する。
- ②循環器内科領域での検査あるいは治療における手技を指導医の指導のもとで学ぶ。
- ③循環器内科外来にて、指導医とともに退院後初回受診患者、定期的に受診する慢性疾患患者等の診療を行う。

④患者や家族との対応、円滑な関係の構築、医療倫理の順守、安全な医療の遂行、これらについても指導医の指導のもとで経験しながら学ぶ。

⑤毎朝の重症回診、週1回の総回診に参加する。

⑥科内の症例カンファレンスのみならず、学会にも参加し、聴講および可能なら発表も行い、大局的かつエビデンスに基づいた診療を行うことを学ぶ。

IV. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
朝	重症回診	重症回診	重症回診	重症回診	重症回診	重症回診	休日
午前	心エコー 外来	心筋 心エコー	心筋	心筋 心エコー	心筋 心エコー	患者対応	
午後	心エコー 心臓 CT	総回診 ドパミン負荷エコー 運動負荷検査	心臓 MRI		ドパミン負荷エコー 運動負荷検査 心臓 CT	患者対応 運動負荷検査	
夕方		カンファレンス					

※休日は日曜日と各自1日公休日があり

V. 評価

①行動目標の評価（別掲）

②経験目標の評価（別掲）

③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医および指導者が研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医・指導者の評価を行う。

呼吸器内科 臨床研修プログラム

責任者	武田 倫子
医師数	2名
取得している資格	日本内科学会総合内科専門医
	日本呼吸器学会専門医
	日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医

I. 一般目標 (GIO)

- ①肺炎、気管支喘息、COPD、肺癌、間質性肺炎等のびまん性肺疾患、さらに呼吸管理までを含む呼吸器疾患の診療と管理の基本的知識と臨床能力を身につける。
- ②呼吸器診療における独特の検査・治療法を学ぶとともに、患者・スタッフ双方から信頼される臨床姿勢・態度を身につける。

II. 行動目標 (SBOs)

- ①病歴聴取と診察のスキルを習得する。
- ②呼吸不全症例に対する酸素使用、非侵襲的陽圧換気療法を含めた人工呼吸器管理について十分にそのメリットおよびデメリットを理解し、個々の症例において適切な呼吸管理を行う。
- ③呼吸器感染症診療の基礎を身につける。
- ④慢性呼吸器疾患症例を通じた呼吸器リハビリテーション全般を理解する。
- ⑤気胸、胸膜炎症例に対する胸腔穿刺、胸腔ドレナージ手技を身につける。
- ⑥胸部異常陰影精査患者を通じた画像の評価、診断方法を身につける。
- ⑦気管支喘息、COPD 急性増悪を通じて気管支拡張薬やステロイド投与を行う。
- ⑧肺癌に対する病態評価と治療方針の基本的な考え方、化学療法と副作用対策を理解する。

III. 研修方略 (Ls)

- ①病棟では指導医とともに入院患者の担当を行い、患者・家族と信頼関係を構築し、患者本位の診療を行う。
- ②呼吸生理、肺循環について理解し、気管支拡張薬、肺血管拡張薬、吸入ステロイド等の薬剤影響を学ぶ。
- ③酸素療法、人工呼吸器機器（非侵襲的陽圧換気療法を含む）について使用原理を学び、正しく初期使用が出来るようになる。
- ④上級医との診察、回診を通じて呼吸器内科に特有な病歴聴取および、聴診などの理学的所見の取り方を習得する。
- ⑤各種検査（気管支鏡検査、超音波気管支鏡、胸腔鏡など）の検査支援を行い、検査法について学ぶ。
- ⑥胸部 X 線、CT 検査等の画像所見読影の方法について学ぶ。
- ⑦呼吸リハビリ患者を通じ、呼吸リハビリの手技や肺機能検査、呼気ガス分析、そして運動負荷試験について学ぶ。
- ⑧カンファレンスを通じ、呼吸器外科に症例提示し、症例の適切な治療について意見交換を行う。

⑨呼吸器内科外来にて、指導医とともに退院後初回受診患者、定期的に受診する慢性疾患患者等の診療を行う。

⑩胸腔穿刺や胸腔ドレナージの手技を上級医とともに行い、気胸や胸膜炎などの症例についても学ぶ。

⑪指導医・上級医とともに必要に応じて救急患者の診療にあたり、診断、治療法を習得する。

IV. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
午前	病棟受持ち患者の対応	外来	病棟回診	気管支鏡検査	外来	病棟回診	休日
午後	抄読会	病棟回診	呼吸器外科とのカンファレンス	カンファレンス	病棟回診	救外対応	

※休日は日曜日と各自1日公休日があり

V. 評価

①行動目標の評価（別掲）

②経験目標の評価（別掲）

③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医および指導者が研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医・指導者の評価を行う。

外科 臨床研修プログラム

責任者	清田 誠志（肝胆膵外科部長）
医師数	7名 ※後期研修医在籍
取得している資格	日本外科学会専門医・指導医
	日本消化器外科学会専門医・指導医
	日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医
	日本食道学会食道科認定医
	日本内視鏡外科学会技術認定医
	臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標（GIO）

- ①医療全般にわたる基本的な知識・技能を有する医師になるために最低限必要とされる外科的疾患の基礎的な知識、手技や治療法を習得する。
- ②臨床医として緊急事態に素早く対応できる判断力や医師患者関係の人間的な信頼関係を構築する。

II. 行動目標（SB0s）

- ①各疾患について、外科的治療の適応に関する基本的診療能力の向上に努める。
- ②患者と医師との関係について、インフォームドコンセントを通じて良好に理解しあう環境を築くことができる。
- ③医療を行う際の安全確認の考え方を理解し安全管理が行える。
- ④外科診療に必要な処置、手技、周術期管理（輸液路の確保、輸液管理、ドレーン管理、清潔操作、皮膚切開、縫合、糸結び）を理解し、行うことができる。
- ⑤手術をはじめ外科診療上で必要な基礎的知識（局所解剖、輸液と輸血、外科的感染症、創傷治癒管理、腫瘍学、外科病理学）について述べる事ができる。
- ⑥患者の病歴の聴取と記録ができ、基本的な身体診察法を理解し行える。
- ⑦外科的患者の治療計画を立案できる。
- ⑧カンファレンスに参加し、症例のプレゼンテーションを行う。
- ⑨外科診療に必要な画像診断（単純写真、造影検査、CT検査、MRI検査、超音波、内視鏡）の読影方法が理解できる。
- ⑩病態に応じた抗菌薬の選択が出来る。
- ⑪入院患者の病態に応じて必要な検査、治療の計画を立てる。
- ⑫臨床上の問題点からその疑問点を見つけ出し、議論することができる。
- ⑬患者への分かりやすい初期説明が実施できる。
- ⑭外科部門スタッフ（同僚医師、上級医、コメディカル等）と良好なコミュニケーションをとることができる。
- ⑮外科緊急時の対応を理解することができる。
- ⑯臨床上の疑問点を文献などから情報収集し解決の糸口を見つけることができる。

⑩終末期患者の身体的、精神的苦痛に配慮でき、緩和することができる。

Ⅲ. 研修方略 (Ls)

①病棟では、指導医とともに入院患者の診療に携わり、疾患の病態を把握する。又、病棟回診に参加し入院患者の診察・処置を経験する。

②手術患者の術前評価・手術適応・予定術式を検討し、患者への説明・手術・術後管理を実践する。

③悪性腫瘍患者の化学療法に適応を検討し、実践する。又、終末期患者の緩和ケアを実践する。

④外傷の診断、治療を行う。

⑤指導医・上級医が担当している外科外来を研修し、病歴聴取、診察、診断、治療について理解する。

⑥手術助手として手術に入る。糸結び、簡単な縫合を実践する。

⑦鼠径ヘルニア、虫垂炎などの手術を上級医の指導の下で経験する。

⑧カンファレンスに参加し、自分の受け持ち患者について、診断・術前評価・手術適応・予定術式をプレゼンテーションする。

Ⅳ. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
朝	カンファレンス		カンファレンス	術前カンファレンス	カンファレンス	カンファレンス	休日
午前	回診	手術	患者対応	手術	手術	患者対応 回診	
午後	患者対応	手術	患者対応 検査 (透視室)	手術	患者対応	患者対応	
夕方			抄読会				

※休日は日曜日と各自 1 日公休日があり

Ⅴ. 評価

①行動目標の評価 (別掲)

②経験目標の評価 (別掲)

③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医および指導者が研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医・指導者の評価を行う。

整形外科 臨床研修プログラム

責任者	寺浦 英俊（整形外科部長）
医師数	8名 ※後期研修医在籍
取得している資格	日本整形外科学会専門医
	日本整形外科学会認定スポーツ医・認定リウマチ医
	日本整形外科学会運動器リハビリテーション医
	日本手外科学会専門医
	日本整形外科学会研修指導講習会受講
	臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標（GIO）

- ①整形外科疾患をもった患者を適切に診断し、治療・管理できるようになるために、整形外科の基礎的な知識、技術を習得する。
- ②救急患者の治療にも携わり、緊急処置が必要な患者の治療に対する対応力も養う。
- ③患者を診療することにより、医師として望ましい姿勢や態度を身につける。

II. 行動目標（SBOs）

- ①患者の病歴を正しく聴取できる。
- ②患者を診察し、他覚的所見をとり、カルテに記載できる。
- ③診察結果から、必要な検査計画がたてられる。
- ④典型的な運動器疾患について、その病態、診断方法、標準的な治療方法について理解する。
- ⑤関節可動域検査の実施ができる。
- ⑥徒手筋力検査の実施と理解ができる。
- ⑦神経学的所見の評価ができる。
- ⑧四肢・体幹のX線所見の読影ができる。
- ⑨運動器疾患におけるCTやMRI所見の読影ができる。
- ⑩関節穿刺、腱鞘内注射、関節腔内注射、神経根ブロック等の処置ができる。
- ⑪整形外科で必要な局所麻酔ができる。
- ⑫骨折・捻挫・打撲の応急処置ができる。
- ⑬シーネ固定、ギプス包帯固定が実施できる。
- ⑭患者本人や家族に対しての病状説明やインフォームドコンセントができる。

III. 研修方略（Ls）

- ①病棟では、指導医とともに入院患者の診療に携わり、疾患の病態を把握し、指示、処方、基本手技、周術期管理、リハビリ処方などを実践する。
- ②指導医・上級医が担当している整形外科外来を研修し、病歴聴取、診察、診断、治療について理解する。
- ③担当患者の手術に手術助手として参加する。また、簡単な止血、皮膚切開・縫合、骨へのピンニングな

どを体験、研修する。

④症例カンファレンスにおいて、担当患者の病歴や治療方針について述べたり、整形外科抄読会で最新の論文のサマリーを発表したりすることにより、プレゼンテーション能力を身につける。

IV. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
朝	カンファレンス		カンファレンス		カンファレンス		休日
午前	手術	病棟 外来	手術	病棟 外来	手術	病棟	
午後	手術	外来	手術	外来	手術	手術	
夕方			抄読会		レントゲンカンファレンス		

※休日は日曜日と各自1日公休日があり

V. 評価

①行動目標の評価（別掲）

②経験目標の評価（別掲）

③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医および指導者が研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医・指導者の評価を行う。

形成外科 臨床研修プログラム

責任者	辻口 幸之助（形成外科顧問）
医師数	2名 ※後期研修医在籍
取得している資格	日本形成外科学会専門医・皮膚腫瘍外科指導専門医
	日本創傷外科学会専門医
	臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標（G10）

- ①創傷治療の基本を身につけるために、創傷治療の過程および治療法を理解し、形成外科的創傷処理法を習得する。
- ②患者を診療することにより、医師として望ましい姿勢や態度を身につける。

II. 行動目標（SB0s）

- ①局所麻酔ができる。
- ②皮膚縫合ができる。
- ③創状態を正確に把握、理解し説明・処置ができる。
- ④褥瘡のデブリードマン、局所治療ができる。
- ⑤顔面、手、軟部組織損傷などの外傷に対し、診断・初期治療ができる。
- ⑥熱傷の深達度・受傷面積を判定し、適切な外用薬の選択および輸液療法を説明できる。
- ⑦腫瘍切除における切開デザイン、皮弁および植皮について計画できる。
- ⑧患者・医療スタッフと良好なコミュニケーションがとれ協調できる。

III. 研修方略（Ls）

- ①病棟では、指導医とともに入院患者の診療に携わり、疾患の病態を把握し、指示、処方、基本手技、周術期管理などを実践する。
- ②指導医・上級医が担当している形成外科外来を研修し、病歴聴取、診察、診断、治療について理解する。
- ③担当患者の手術に手術助手として参加する。
- ④外傷患者の局所麻酔、縫合処置を指導医・上級医の指導の下に行う。
- ⑤上級医とともに全病棟褥瘡回診を行う。
- ⑥症例カンファレンスにおいて、担当患者の病歴や治療方針について述べたり、形成外科抄読会で最新の論文のサマリーを発表したりすることにより、プレゼンテーション能力を身につける。

IV. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
午前	病棟・外来での 診察と処置 処方・各種 ミーティングなど	病棟・外来での 診察と処置 処方・各種 ミーティングなど	病棟・外来での 診察と処置 処方・各種 ミーティングなど	病棟・外来での 診察と処置 処方・各種 ミーティングなど	病棟・外来での 診察と処置 処方・各種 ミーティングなど	病棟・外来での 診察と処置 処方・各種 ミーティングなど	休日
午後	手術	外来手術 全病棟褥瘡回診 抄読会 術後カンファレンス	手術	外来手術	手術 抄読会 カンファレンス		

※休日は日曜日と各自 1 日公休日があり

V. 評価

- ①行動目標の評価（別掲）
- ②経験目標の評価（別掲）
- ③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医および指導者が研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医・指導者の評価を行う。

脳神経外科 臨床研修プログラム

責任者	磯野 直史（脳神経外科部長）
医師数	1名
取得している資格	日本脳神経外科学会専門医
	日本脳卒中学会専門医
	日本病態栄養学会病態栄養専門医・研修指導医・NST コーディネーター
	—
	日本リハビリテーション医学会認定臨床医
	日本神経内視鏡学会神経内視鏡技術認定医
	臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標（G10）

- ①医療人として必要な、患者－医師関係の構築、チーム医療の実践、問題対応能力の習得を目的とする。
- ②脳神経外科医として必要な基本的な医学知識を身につけ、医療行為を習得し、安全な医療実施を遂行できるための人格的基盤を形成する。

II. 行動目標（SB0s）

- ①患者から適切な病歴聴取ができる。
- ②一般的な全身の観察、所見の記載、意識障害患者の診察ができる。
- ③脳血管障害、頭部外傷及び脳神経外科の救急疾患に対して迅速かつ適切に、指導医・上級医とともに治療にあたることができる。
- ④神経学的所見を正確に行い記載することができる。
- ⑤脳神経外科での基本的検査（X線、頭部CTまたはMRI）・脳波等を読影し、結果を診断できる。
- ⑥髄液検査（腰椎穿刺）および脳血管撮影を指導医・上級医とともに行うことができる。
- ⑦脳神経外科疾患の手術適応を学習する。
- ⑧脳神経外科手術における開閉頭の補助ができる。
- ⑨症状や疾患について専門医への適切なコンサルテーションができる。
- ⑩患者および家族に、脳神経外科的検査・手術について適切に説明できる。
- ⑪神経学的後遺障害を持つ患者を理解し、医学的に支援をすることができる。

III. 研修方略（Ls）

- ①病棟では、指導医とともに入院患者の診療に携わり、疾患の病態を把握し、指示、処方、基本手技、周術期管理などを実践する。
- ②指導医・上級医が担当している脳神経外科外来を研修し、病歴聴取、診察、診断、治療について理解する。
- ③救急を含む脳神経外科領域の診療に積極的に参加する。
- ④患者の重症度を迅速に把握し、意識状態・神経学的重症度を Japan Coma Scale (JCS)、Glasgow Coma

Scale (GCS)、NIHSS を用いて評価する。

⑤各種神経放射線検査の特性について理解する。

⑥神経放射線検査結果を評価する。

⑦適切な創部の消毒、縫合を習得・実践する。

⑧腰椎穿刺の手技を習得し、実践し、検査結果を評価する。

⑨気管内挿管、中心静脈カテーテル穿刺、気管切開、脳血管撮影の手技を習得する。

⑩穿頭洗浄術、脳室ドレナージ術において、助手あるいは術者として手術に入る。

⑪開頭手術の助手として手術に参加する。

⑫指導医・上級医とともに NST 回診を行う。(医師、看護師、管理栄養士、薬剤師だけではなく言語聴覚士や ICT(Infection Control Team 感染対策チーム) 看護師も交えたチーム編成)

⑬症例カンファレンスにおいて、担当患者の病歴や治療方針について述べたり、抄読会で最新の論文のサマリーを発表したりすることにより、プレゼンテーション能力を身につける。

IV. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
午前	手術	外来	病棟	手術	病棟	病棟	休日
午後	手術	病棟 脳血管撮影	病棟 脳血管撮影	手術	病棟 脳血管撮影 NST 回診	病棟 脳血管撮影	

※休日は日曜日と各自 1 日公休日があり

V. 評価

①行動目標の評価 (別掲)

②経験目標の評価 (別掲)

③評価と指導體制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医および指導者が研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医・指導者の評価を行う。

救急 臨床研修プログラム

責任者	廣橋 一裕（救急・総合診療センター顧問）
	池邊 孝（副院長、救急・総合診療センター長）
医師数	3名
取得している資格	日本プライマリ・ケア連合学会認定医・認定指導医
	日本肝臓学会専門医・指導医
	日本消化器外科学会終身指導医・専門医・認定医・消化器がん外科治療認定医
	日本消化器病学会指導医
	日本肝胆膵外科学会名誉指導医
	日本外科学会専門医・指導医
	日本救急医学会救急専門医
	日本がん治療認定医機構認定医・暫定教育医
	日本病院総合診療医学会認定総合診療医
	日本救急医学会認定 IGLS コースディレクター
	日本消化管学会胃腸科指導医
	外国人医師（臨床）修練指導医
	身体障害者指定医師（肝臓機能障害）
	麻酔科標榜医
死体解剖資格取得	
臨床研修指導医養成講習修了	

I. 一般目標（G10）

- ①臨床医として救急患者の初期治療に必要な知識、技能を習得し、傷病に対する理解を深め、積極的に問題を解決する能力を身につける。
- ②患者を全人的に把握して救急患者におけるインフォームドコンセントに根ざした医師－患者間の信頼関係を築く習慣を身につける。

II. 行動目標（SBOs）

- ①患者・家族との信頼関係を構築した上での医療面接ができる。
- ②基本的な身体診察法（システム・レビューを含む）を習得する。
- ③基本的な臨床検査、診断法を適切に指示し、その結果を評価することができる。（血液検査、尿検査、心電図検査、細菌学的検査、髄液検査、超音波検査、X線・CT・MRIなどの画像検査）
- ④救急医療において必要な基本的手技が実施できる。（気道確保、圧迫止血法、採血法、体腔穿刺法、注射法、局所麻酔法、創部消毒、導尿法）
- ⑤基本的治療ができる。（薬物投与、輸液・輸血の実施を含む）
- ⑥医療記録を作成できる。（指示簿の記載、診療情報提供書、診断書・死亡診断書の作成を含む）
- ⑦診療計画を作成できる。（入退院の適否評価、診療ガイドラインの理解を含む）

- ⑧緊急を要する疾患の初期治療ができる。(心肺停止、ショック、意識障害、脳血管障害、急性呼吸不全、外傷、急性中毒、熱傷)
- ⑨専門医への適切なコンサルテーションができる。
- ⑩重症度、緊急度を判断し、処置および検査の優先順位を決定できる。
- ⑪心肺蘇生法の意義を理解し、二次救命処置 (ACLS) ができ、また一次救命処置 (BLS) の指導ができる。
- ⑫大規模災害時の救急医療体制、災害拠点病院の役割、位置づけが理解できる。

Ⅲ. 研修方略 (Ls)

- ①救急外来で指導医とともに初期対応を行う。
- ②病棟で指導医とともに入院した患者への対応、回診を行う。
- ③患者の病態に応じた適切な検査を行う。
- ④専門診療科への適切なコンサルテーションを行う。
- ⑤MSW や地域医療連携室と協力して、地域医療機関からの診療要請に対応する。
- ⑥カンファレンスや症例検討会に参加する。
- ⑦内科学会、救急医学会、プライマリ・ケア学会での症例発表を行う。
- ⑧医学生への指導を行う。

Ⅳ. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
朝	カンファレンス	カンファレンス	カンファレンス	カンファレンス	カンファレンス	カンファレンス	休日
午前	救急患者対応	救急患者対応	病棟回診 救急患者対応	救急患者対応	救急患者対応	病棟回診 救急患者対応	
午後	救急患者対応	救急患者対応	救急患者対応	救急患者対応	救急患者対応	救急患者対応	
夕方				カンファレンス 症例検討会			

※休日は日曜日と各自 1 日公休日があり

Ⅴ. 評価

- ①行動目標の評価 (別掲)
- ②経験目標の評価 (別掲)
- ③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医および指導者が研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医・指導者の評価を行う。

麻酔科 臨床研修プログラム

責任者	波多野 雅人（麻酔科部長、手術センター長）
医師数	3名
取得している資格	日本麻酔科学会専門医・指導医
	麻酔科標榜医
	日本ペインクリニック学会専門医
	臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標（G10）

- ①周術期管理を確実に進めるようにするために解剖・生理・薬理学らの基礎医学を復習し、また、患者の基礎疾患・合併症を評価し、適切かつ安全・良質な麻酔管理を実践する。
- ②あらゆる年齢層に対し、術前・術中・術後に渡る麻酔管理および疼痛管理を習得する。
- ③基本的手技（静脈確保、マスク換気、気管挿管、動脈採血、聴診法、脊髄くも膜下麻酔）の習得は必須目標とする。

II. 行動目標（SB0s）

- ①用手的な方法による気道の確保ができる。
- ②マスク・バッグによる人工呼吸ができる。
- ③挿管器具を迅速に用意して気管挿管を行い、人工呼吸をすることができる。
- ④ラリンジアルマスク、ブレード喉頭鏡、エアウェイスコープなどの気道確保用具についての知識と操作法を理解できる。
- ⑤末梢静脈路の確保ができる。
- ⑥動脈ラインの挿入・管理ができる。
- ⑦全身麻酔の導入と管理ができる。
- ⑧脊髄くも膜下麻酔・硬膜外麻酔の導入と管理ができる。
- ⑨術後鎮痛法としての硬膜外麻酔、各種神経ブロック、PCA、その他各種鎮痛薬の使用法を理解できる。

III. 研修方略（Ls）

- ①患者評価を的確に行う。
- ②患者および当該診療科医師との間の意見交換ができる。
- ③術前の症例検討会で、要領よく患者紹介、麻酔計画を発表できる能力、知識を身につける。理論立った実施ができ、考察できる能力を養う。
- ④麻酔管理上の知識や技能を十分修得し、安全かつ安心を与える麻酔管理を実践する。
- ⑤術後に患者回診を行い麻酔経過を説明し、実施した麻酔管理を評価する。
- ⑥術後の疼痛管理に注目し、術中から術後痛制御を目指した麻酔管理を行う。

IV. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
午前	麻酔研修 術前・術後の 患者対応	麻酔研修 術前・術後の 患者対応	麻酔研修 術前・術後の 患者対応	麻酔研修 術前・術後の 患者対応	麻酔研修 術前・術後の 患者対応	麻酔研修 術前・術後の 患者対応	休日
午後	麻酔研修 術前・術後の 患者対応	麻酔研修 術前・術後の 患者対応	麻酔研修 術前・術後の 患者対応	麻酔研修 術前・術後の 患者対応	麻酔研修 術前・術後の 患者対応	麻酔研修 術前・術後の 患者対応	
夕方	反省 翌日の計画	反省 翌日の計画	反省 翌日の計画	反省 翌日の計画	反省 翌日の計画	反省 翌日の計画	

※休日は日曜日と各自1日公休日があり

V. 評価

- ①行動目標の評価（別掲）
- ②経験目標の評価（別掲）
- ③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医および指導者が研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医・指導者の評価を行う。

放射線科 臨床研修プログラム

責任者	藤本 圭志（放射線科部長、医局長）
医師数	3名
取得している資格	日本医学放射線科学会専門医・指導医・放射線診断専門医 臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標（G10）

- ①画像診断、IVRの適応や禁忌事項を理解し、臨床医として適切な検査および治療依頼をするための知識を習得する。
- ②画像診断に関しては、画像解剖など読影に必要な基礎的知識を習得する。

II. 行動目標（SB0s）

- ①CT検査にて造影剤の注入方法・撮影方法などのCT撮影プロトコルを理解する。
- ②MRI検査にて各種の撮影シーケンス、各種の造影剤使用方法を実際に見学し、MRI検査方法の基礎を習得する。
- ③セルディンガー法による動脈穿刺とシース挿入、腹腔動脈選択など基礎的なカテーテル操作、動脈穿刺部位の確実な止血方法を習得する。
- ④消化管検査や血管撮影検査での放射線防護方法を習得する。
- ⑤IVRの基礎的手技を経験する。

III. 研修方略（Ls）

- ①CT検査室にて造影剤の使用法・適応および副作用対策や撮影方法を理解する。
- ②MRI検査室にて体内金属などの禁忌事項、各種撮影シーケンスや造影剤の使用法・適応を理解し、MRI読影のための基礎知識を習得する。
- ③読影室にてCT・MRI検査の読影を実施し、上級医・指導医による確認と指導を受ける。
- ④血管撮影室にてセルディンガー法や基礎的なカテーテル操作や止血手技の研修を受ける。各種IVRの適応を理解する。

IV. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
午前	各部位の読影	各部位の読影	各部位の読影	各部位の読影	各部位の読影	各部位の読影	休日
午後	各部位の読影	CT・MRI検査室	各部位の読影	血管撮影室	各部位の読影	各部位の読影	

※休日は日曜日と各自1日公休日があり

V. 評価

①行動目標の評価（別掲）

②経験目標の評価（別掲）

③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医および指導者が研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医・指導者の評価を行う。

緩和ケア科 臨床研修プログラム

責任者	大場 一輝（緩和ケア科部長）
医師数	1名
取得している資格	日本消化器病学会専門医
	日本消化器外科学会専門医
	日本外科学会専門医
	日本静脈経腸栄養学会認定 TNT ドクター
	ACLS Provider (AHA)
	厚生労働省 緩和ケア研修 修了
	臨床研修指導医養成講習修了

I. 一般目標 (G10)

緩和ケアでの終末期医療という特有用な現場での経験を通し、一般診療に活かせるように終末期における病状、病態を理解し、診察法を体得し、検査の是非の判断能力を習得する。

II. 行動目標 (SBOs)

- ①全人的苦痛を理解し、対応ができる。
- ②医学的技術・処置の仕方およびコミュニケーション技術を学ぶ。
- ③家族ケアの重要性を理解し、対応ができる。

III. 研修方略 (Ls)

- ①緩和ケア病棟でのカンファレンスと病棟業務、緩和ケアチーム回診を行う。隔週金曜日の午前に、精神科医（非常勤）のリエゾン診察を研修する。
- ②指導医が担当している緩和ケア外来を研修する。
- ③診察に必要な情報を患者・家族から聴取しカルテなどから収集する。
- ④全人的苦痛（身体的・精神的・社会的・スピリチュアルな苦痛）の評価を行う。
- ⑤全人的苦痛の評価に基づきケア（特に身体的苦痛の緩和のためのオピオイドを中心とした薬物療法）を立案する。
- ⑥今後のことを想定し end-of-life discussion を行う。
- ⑦多職種と連携し在宅療養への移行を協議し実現する。
- ⑧緩和ケアに必要な情報を日本緩和医療学会のガイドラインや文献から収集する。

IV. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
午前	病棟	病棟	病棟	病棟	病棟 カンファレンス	病棟	休日
午後	病棟	病棟	外来	病棟	病棟	病棟	

※休日は日曜日と各自1日公休日があり

V. 評価

①行動目標の評価（別掲）

②経験目標の評価（別掲）

③評価と指導体制

研修終了後に EPOC と独自の評価表に基づき、指導医および指導者が研修医の評価を行うとともに、研修医も自己評価及び研修診療科と指導医・指導者の評価を行う。

臨床研修到達目標（EPOC 評価項目一覧）

到達目標に関しては厚生労働省発表の臨床研修の到達目標に準じ、評価方法はEPOCにて行う。

行動目標

（3段階評価：a. 十分できる b. できる c. 要努力 ? . 評価不能）

医療者として必要な基本姿勢・態度

（1）患者－医師関係

患者を全人的に理解し、患者・家族と良好な人間関係を確立するために、

- 1) 患者、家族のニーズを身体・心理・社会的側面から把握できる。
- 2) 医師、患者・家族がともに納得できる医療を行うためのインフォームド・コンセントが実施できる。
- 3) 守秘義務を果たし、プライバシーへの配慮ができる。

（2）チーム医療

医療チームの構成員としての役割を理解し、保健・医療・福祉の幅広い職種からなる他のメンバーと協調するために、

- 1) 指導医や専門医に適切なタイミングでコンサルテーションができる。
- 2) 上級及び同僚医師や他の医療従事者と適切なコミュニケーションがとれる。
- 3) 同僚及び後輩へ教育的配慮ができる。
- 4) 患者の転入・転出に当たり、情報を交換できる。
- 5) 関係機関や諸団体の担当者とコミュニケーションがとれる。

（3）問題対応能力

患者の問題を把握し、問題対応型の思考を行い、生涯にわたる自己学習の習慣を身に付けるために、

- 1) 臨床上の疑問点を解決するための情報を収集して評価し、当該患者への適応を判断できる。
（EBM =Evidence Based Medicine の実践ができる）
- 2) 自己評価及び第三者による評価を踏まえた問題対応能力の改善ができる。
- 3) 臨床研究や治験の意義を理解し、研究や学会活動に関心を持つ。
- 4) 自己管理能力を身に付け、生涯にわたり基本的診療能力の向上に努める。

（4）安全管理

患者及び医療従事者にとって安全な医療を遂行し、安全管理の方策を身に付け、危機管理に参画するために、

- 1) 医療を行う際の安全確認の考え方を理解し、実施できる。
- 2) 医療事故防止及び事故後の対処について、マニュアルなどに沿って行動できる。
- 3) 院内感染対策（Standard Precautionsを含む）を理解し、実施できる。

（5）症例呈示

チーム医療の実践と自己の臨床能力向上に不可欠な、症例呈示と意見交換を行うために、

- 1) 症例呈示と討論ができる。
- 2) 臨床症例に関するカンファレンスや学術集会に参加する。

（6）医療の社会性

医療の持つ社会的側面の重要性を理解し、社会に貢献するために、

- 1) 保健医療法規・制度を理解し、適切に行動できる。
- 2) 医療保険、公費負担医療を理解し、適切に診療できる。
- 3) 医の倫理、生命倫理について理解し、適切に行動できる。
- 4) 医薬品や医療用具による健康被害の発生防止について理解し、適切に行動できる。

経験目標

A 経験すべき診察法・検査・手技

(3段階評価：a. 十分できる b. できる c. 要努力 ? 評価不能)

(1) 医療面接

患者・家族との信頼関係を構築し、診断・治療に必要な情報が得られるような医療面接を実施するために、

- 1) 医療面接におけるコミュニケーションの持つ意義を理解し、コミュニケーションスキルを身に付け、患者の解釈モデル、受診動機、受療行動を把握できる。
- 2) 患者の病歴（主訴、現病歴、既往歴、家族歴、生活・職業歴、系統的レビュー）の聴取と記録ができる。
- 3) 患者・家族への適切な指示、指導ができる。

(2) 基本的な身体診察法

病態の正確な把握ができるよう、全身にわたる身体診察を系統的に実施し、記載するために、

- 1) 全身の観察（バイタルサインと精神状態の把握、皮膚や表在リンパ節の診察を含む）ができ、記載できる。
- 2) 頭頸部の診察（眼瞼・結膜、眼底、外耳道、鼻腔口腔、咽頭の観察、甲状腺の触診を含む）ができ、記載できる。
- 3) 胸部の診察（乳房の診察を含む）ができ、記載できる。
- 4) 腹部の診察（直腸診を含む）ができ、記載できる。
- 5) 泌尿・生殖器の診察（産婦人科的診察を含む）ができ、記載できる。
- 6) 骨・関節・筋肉系の診察ができ、記載できる。
- 7) 神経学的診察ができ、記載できる。
- 8) 小児の診察（生理的所見と病的所見の鑑別を含む）ができ、記載できる。
- 9) 精神面の診察ができ、記載できる。

(3) 基本的な臨床検査

病態と臨床経過を把握し、医療面接と身体診察から得られた情報をもとに必要な検査を、

A：自ら実施し、結果を解釈できる。（受け持ち症例でなくてもよい）
その他：検査の適応が判断でき、結果の解釈ができる。
※必修項目 下線の検査について経験（受け持ち患者の検査として診療に活用）があること。

- 1) 一般尿検査（尿沈渣顕微鏡検査を含む）
- 2) 便検査（潜血、虫卵）
- 3) 血算・白血球分画
- A** 4) 血液型判定・交差適合試験
- A** 5) 心電図（12誘導）、負荷心電図
- A** 6) 動脈血ガス分析
- 7) 血液生化学的検査
 - ・簡易検査（血糖、電解質、尿素窒素など）
- 8) 血液免疫血清学的検査（免疫細胞検査、アレルギー検査を含む）
- 9) 細菌学的検査・薬剤感受性検査
 - ・検体の採取（痰、尿、血液など）
 - ・簡単な細菌学的検査（グラム染色など）
- 10) 呼吸機能検査
 - ・スパイロメトリー
- 11) 髄液検査
- 12) 細胞診・病理組織検査
- 13) 内視鏡検査
- A** 14) 超音波検査
- 15) 単純X線検査
- 16) 造影X線検査
- 17) X線CT検査
- 18) MRI検査
- 19) 核医学検査
- 20) 神経生理学的検査（脳波・筋電図など）

(4) 基本的手技

基本的手技の適応を決定し、実施するために、

※必修項目 下線の手技を自ら行った経験があること。

- 1) 気道確保を実施できる。
- 2) 人工呼吸を実施できる。(バッグ・バルブ・マスクによる徒手換気を含む)
- 3) 胸骨圧迫を実施できる。
- 4) 圧迫止血法を実施できる。
- 5) 包帯法を実施できる。
- 6) 注射法(皮内、皮下、筋肉、点滴、静脈確保、中心静脈確保)を実施できる。
- 7) 採血法(静脈血、動脈血)を実施できる。
- 8) 穿刺法(腰椎)を実施できる。
- 9) 穿刺法(胸腔、腹腔)を実施できる。
- 10) 導尿法を実施できる。
- 11) ドレーン・チューブ類の管理ができる。
- 12) 胃管の挿入と管理ができる。
- 13) 局所麻酔法を実施できる。
- 14) 創部消毒とガーゼ交換を実施できる。
- 15) 簡単な切開・排膿を実施できる。
- 16) 皮膚縫合法を実施できる。
- 17) 軽度の外傷・熱傷の処置を実施できる。
- 18) 気管挿管を実施できる。
- 19) 除細動を実施できる。

(5) 基本的治療法

基本的治療法の適応を決定し、適切に実施するために、

- 1) 療養指導(安静度、体位、食事、入浴、排泄、環境整備を含む)ができる。
- 2) 薬物の作用、副作用、相互作用について理解し、薬物治療(抗菌薬、副腎皮質ステロイド薬、解熱薬、麻薬、血液製剤を含む)ができる。
- 3) 基本的な輸液ができる。
- 4) 輸血(成分輸血を含む)による効果と副作用について理解し、輸血が実施できる。

(6) 医療記録

チーム医療や法規との関連で重要な医療記録を適切に作成し、管理するために、

※必修項目 下線を自ら行った経験があること。

- 1) 診療録(退院時サマリーを含む。)をPOS(Problem Oriented System)に従って記載し管理できる。
- 2) 処方箋、指示箋を作成し、管理できる。
- 3) 診断書、死亡診断書、死体検案書その他の証明書を作成し、管理できる。
- 4) CPC(臨床病理検討会)レポート(剖検報告)を作成し、症例呈示できる。
- 5) 紹介状と、紹介状への返信を作成でき、それを管理できる。

(7) 診療計画

保健・医療・福祉の各側面に配慮しつつ、診療計画を作成し、評価するために、

- 1) 診療計画(診断、治療、患者・家族への説明を含む)を作成できる。
- 2) 診療ガイドラインやクリティカルパスを理解し活用できる。
- 3) 入退院の適応を判断できる。(デイスージャリー症例を含む)
- 4) QOL(Quality of Life)を考慮にいれた総合的な管理計画(リハビリテーション、社会復帰、在宅医療、介護を含む)へ参画する。

B 経験すべき症状・病態・疾患

(2段階評価：経験あり、経験なし)

研修の最大の目的は、患者の呈する症状と身体所見、簡単な検査所見に基づいた鑑別診断、初期治療を的確に行う能力を獲得することにある。

(1) 頻度の高い症状

※必修項目 下線の症状を経験（自ら診療し、鑑別診断を行う）し、レポートを提出する。

- 1) 全身倦怠感
- 2) 不眠
- 3) 食欲不振
- 4) 体重減少、体重増加
- 5) 浮腫
- 6) リンパ節腫脹
- 7) 発疹
- 8) 黄疸
- 9) 発熱
- 10) 頭痛
- 11) めまい
- 12) 失神
- 13) けいれん発作
- 14) 視力障害、視野狭窄
- 15) 結膜の充血
- 16) 聴覚障害
- 17) 鼻出血
- 18) 嘔声
- 19) 胸痛
- 20) 動悸
- 21) 呼吸困難
- 22) 咳・痰
- 23) 嘔気・嘔吐
- 24) 胸やけ
- 25) 嚥下困難
- 26) 腹痛
- 27) 便通異常(下痢、便秘)
- 28) 腰痛
- 29) 関節痛
- 30) 歩行障害
- 31) 四肢のしびれ
- 32) 血尿
- 33) 排尿障害（尿失禁・排尿困難）
- 34) 尿量異常
- 35) 不安・抑うつ

(2) 緊急を要する症状・病態

※必修項目 下線の病態を経験（初期治療に参加）すること。

- 1) 心肺停止
- 2) ショック
- 3) 意識障害
- 4) 脳血管障害
- 5) 急性呼吸不全

- 6) 急性心不全
- 7) 急性冠症候群
- 8) 急性腹症
- 9) 急性消化管出血
- 10) 急性腎不全
- 11) 流・早産及び満期産
- 12) 急性感染症
- 13) 外傷
- 14) 急性中毒
- 15) 誤飲、誤嚥
- 16) 熱傷
- 17) 精神科領域の救急

(3) 経験が求められる疾患・病態

※必修項目

- A 疾患については入院患者を受け持ち、診断、検査、治療方針について症例レポートを提出すること。
 - B 疾患については、外来診療又は受け持ち入院患者（合併症含む）で自ら経験すること。
- 外科症例（手術を含む）を1例以上受け持ち、診断、検査、術後管理等について症例レポートを提出すること。
 ※全疾患（88項目）のうち70%以上を経験することが望ましい。

①血液・造血器・リンパ網内系疾患

- B [1] 貧血（鉄欠乏性貧血、二次性貧血）
- [2] 白血病
- [3] 悪性リンパ腫
- [4] 出血傾向・紫斑病（播種性血管内凝固症候群：DIC）

②神経系疾患

- A [1] 脳・脊髄血管障害（脳梗塞、脳内出血、くも膜下出血）
- [2] 認知症疾患
- [3] 脳・脊髄外傷（頭部外傷、急性硬膜外・硬膜下血腫）
- [4] 変性疾患（パーキンソン病）
- [5] 脳炎・髄膜炎

③皮膚系疾患

- B [1] 湿疹・皮膚炎群（接触皮膚炎、アトピー性皮膚炎）
- B [2] 蕁麻疹
- [3] 薬疹
- B [4] 皮膚感染症

④運動器（筋骨格）系疾患

- B [1] 骨折
- B [2] 関節・靭帯の損傷及び障害
- B [3] 骨粗鬆症
- B [4] 脊柱障害（腰椎椎間板ヘルニア）

⑤循環器系疾患

- A [1] 心不全
- B [2] 狭心症、心筋梗塞
- [3] 心筋症
- B [4] 不整脈（主要な頻脈性、徐脈性不整脈）
- [5] 弁膜症（僧帽弁膜症、大動脈弁膜症）
- B [6] 動脈疾患（動脈硬化症、大動脈瘤）
- [7] 静脈・リンパ管疾患（深部静脈血栓症、下肢静脈瘤、リンパ浮腫）
- A [8] 高血圧症（本態性、二次性高血圧症）

⑥呼吸器系疾患

- [1]呼吸不全
- [2]呼吸器感染症（急性上気道炎、気管支炎、肺炎）
- [3]閉塞性・拘束性肺疾患（気管支喘息、気管支拡張症）
- [4]肺循環障害（肺塞栓・肺梗塞）
- [5]異常呼吸（過換気症候群）
- [6]胸膜・縦隔・横隔膜疾患（自然気胸、胸膜炎）
- [7]肺癌

⑦消化器系疾患

- [1]食道・胃・十二指腸疾患（食道静脈瘤、胃癌、消化性潰瘍、胃・十二指腸炎）
- [2]小腸・大腸疾患（イレウス、急性虫垂炎、痔核・痔瘻）
- [3]胆嚢・胆管疾患（胆石症、胆嚢炎、胆管炎）
- [4]肝疾患（ウイルス性肝炎、急性・慢性肝炎、肝硬変、肝癌、アルコール性肝障害、薬物性肝障害）
- [5]膵臓疾患（急性・慢性膵炎）
- [6]横隔膜・腹壁・腹膜（腹膜炎、急性腹症、ヘルニア）

⑧腎・尿路系（体液・電解質バランスを含む）疾患

- [1]腎不全（急性・慢性腎不全、透析）
- [2]原発性糸球体疾患（急性・慢性糸球体腎炎症候群、ネフローゼ症候群）
- [3]全身性疾患による腎障害（糖尿病性腎症）
- [4]泌尿器科的腎・尿路疾患（尿路結石症、尿路感染症）

⑨妊娠分娩と生殖器疾患

- [1]妊娠分娩（正常妊娠、流産、早産、正常分娩、産科出血、乳腺炎、産褥）
- [2]女性生殖器及びその関連疾患（月経異常（無月経を含む）、不正性器出血、更年期障害、外陰・膣・骨盤内感染症、骨盤内腫瘍、乳腺腫瘍）
- [3]男性生殖器疾患（前立腺疾患、勃起障害、精巣腫瘍）

⑩内分泌・栄養・代謝系疾患

- [1]視床下部・下垂体疾患（下垂体機能障害）
- [2]甲状腺疾患（甲状腺機能亢進症、甲状腺機能低下症）
- [3]副腎不全
- [4]糖代謝異常（糖尿病、糖尿病の合併症、低血糖）
- [5]高脂血症
- [6]蛋白及び核酸代謝異常（高尿酸血症）

⑪眼・視覚系疾患

- [1]屈折異常（近視、遠視、乱視）
- [2]角結膜炎
- [3]白内障
- [4]緑内障
- [5]糖尿病、高血圧・動脈硬化による眼底変化

⑫耳鼻・咽喉・口腔系疾患

- [1]中耳炎
- [2]急性・慢性副鼻腔炎
- [3]アレルギー性鼻炎
- [4]扁桃の急性・慢性炎症性疾患
- [5]外耳道・鼻腔・咽頭・喉頭・食道の代表的な異物

⑬精神・神経系疾患

- [1]症状精神病
- [2]認知症（血管性認知症を含む）
- [3]アルコール依存症
- [4]気分障害（うつ病、躁うつ病を含む）
- [5]統合失調症
- [6]不安障害（パニック障害）

[7] 身体表現性障害、ストレス関連障害

⑭ 感染症

- [1] ウイルス感染症（インフルエンザ、麻疹、風疹、水痘、ヘルペス、流行性耳下腺炎）
- [2] 細菌感染症（ブドウ球菌、MRSA、A群レンサ球菌、クラミジア）
- [3] 結核
- [4] 真菌感染症（カンジダ症）
- [5] 性感染症
- [6] 寄生虫疾患

⑮ 免疫・アレルギー疾患

- [1] 全身性エリテマトーデスとその合併症
- [2] 関節リウマチ
- [3] アレルギー疾患

⑯ 物理・化学的因子による疾患

- [1] 中毒（アルコール、薬物）
- [2] アナフィラキシー
- [3] 環境要因による疾患（熱中症、寒冷による障害）
- [4] 熱傷

⑰ 小児疾患

- [1] 小児けいれん性疾患
- [2] 小児ウイルス感染症（麻疹、流行性耳下腺炎、水痘、突発性発疹、インフルエンザ）
- [3] 小児細菌感染症
- [4] 小児喘息
- [5] 先天性心疾患

⑩ 加齢と老化

- [1] 高齢者の栄養摂取障害
- [2] 老年症候群（誤嚥、転倒、失禁、褥瘡）

C 特定の医療現場の経験

(3段階評価： a. 十分できる b. できる c. 要努力 ? . 評価不能)

必修項目にある現場の経験とは、各現場における到達目標の項目のうち一つ以上経験すること。

(1) 救急医療

生命や機能的予後に係わる、緊急を要する病態や疾病、外傷に対して適切な対応をするために、

※必修項目 救急医療の現場を経験すること。

- 1) バイタルサインの把握ができる。
- 2) 重症度及び緊急度の把握ができる。
- 3) ショックの診断と治療ができる。
- 4) 二次救命処置 (ACLS = Advanced Cardiovascular Life Support、呼吸・循環管理を含む)ができ、一次救命処置 (BLS = Basic Life Support) を指導できる。
※ ACLS は、バッグ・バルブ・マスク等を使う心肺蘇生法や除細動、気管挿管、薬剤投与等の一定のガイドラインに基づく救命処置を含み、BLS には、気道確保、胸骨圧迫、人工呼吸等機器を使用しない処置が含まれる。
- 5) 頻度の高い救急疾患の初期治療ができる。
- 6) 専門医への適切なコンサルテーションができる。
- 7) 大災害時の救急医療体制を理解し、自己の役割を把握できる。

(2) 予防医療

予防医療の理念を理解し、地域や臨床の場での実践に参画するために、

※必修項目 予防医療の現場を経験すること。

- 1) 食事・運動・休養・飲酒・禁煙指導とストレスマネジメントができる。
- 2) 性感染症予防、家族計画を指導できる。
- 3) 地域・産業・学校保健事業に参画できる。
- 4) 予防接種を実施できる。

(3) 地域医療

地域医療を必要とする患者とその家族に対して、全人的に対応するために、

※必修項目 へき地・離島診療所、中小病院・診療所等の地域医療の現場を経験すること。

- 1) 患者が営む日常生活や居住する地域の特性に即した医療 (在宅医療を含む) について理解し、実践する。
- 2) 診療所の役割 (病診連携への理解を含む) について理解し、実践する。
- 3) へき地・離島医療について理解し、実践する。

(4) 周産・小児・成育医療

周産・小児・成育医療を必要とする患者とその家族に対して、全人的に対応するために、

※必修項目 周産・小児・成育医療の現場を経験すること。

- 1) 周産期や小児の各発達段階に応じて適切な医療が提供できる。
- 2) 周産期や小児の各発達段階に応じて心理社会的側面への配慮ができる。

- 3) 虐待について説明できる。
- 4) 学校、家庭、職場環境に配慮し、地域との連携に参画できる。
- 5) 母子健康手帳を理解し活用できる。

(5) 精神保健・医療

精神保健・医療を必要とする患者とその家族に対して、全人的に対応するために、

※必修項目 精神保健福祉センター、精神科病院等の精神保健・医療の現場を経験すること。

- 1) 精神症状の捉え方の基本を身につける。
- 2) 精神疾患に対する初期的対応と治療の実際を学ぶ。
- 3) デイケアなどの社会復帰や地域支援体制を理解する。

(6) 緩和ケア、終末期医療

緩和ケアや終末期医療を必要とする患者とその家族に対して、全人的に対応するために、

※必修項目 臨終の立ち会いを経験すること。

- 1) 心理社会的側面への配慮ができる。
- 2) 治療の初期段階から基本的な緩和ケア（WHO方式がん疼痛治療法を含む）ができる。
- 3) 告知をめぐる諸問題への配慮ができる。
- 4) 死生観・宗教観などへの配慮ができる。

(7) 地域保健

地域保健を必要とする患者とその家族に対して、全人的に対応するために、保健所、介護老人保健施設、社会福祉施設、赤十字社血液センター、各種検診・健診の実施施設等の地域保健の現場において、

- 1) 保健所の役割（地域保健・健康増進への理解を含む）について理解し、実践する。
- 2) 社会福祉施設等の役割について理解し、実践する。

【研修スケジュール】

東住吉森本病院研修プログラム（例）

【1年次】

研修期間	6ヶ月	3ヶ月	3ヶ月
診療科	内科	選択必修科目	救急

【2年次】

研修期間	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月								
診療科	地域医療	精神科	産婦人科	小児科	選択	選択	選択	選択	選択	選択	選択	選択

必修科目：内科6ヶ月（消化器3ヶ月・循環器3ヶ月）
 救急3ヶ月
 地域医療（診療所・リハビリテーション病院）
 精神科1ヶ月（丹比荘病院）
 産婦人科1ヶ月・小児科1ヶ月（大正病院）

選択必修科目：外科3ヶ月、または外科2ヶ月と麻酔科1ヶ月より選択

選択科目8ヶ月：消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、外科、整形外科、形成外科、
 脳神経外科、救急、麻酔科、放射線科、緩和ケア科より選択

各自の希望にあわせ、8ヶ月のカリキュラムスケジュールを作成

※2年次の研修時期は協力病院と相談の上、調整